日ロ交流

発行: 特定非営利活動法人日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page: http://www.nichiro.org
〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14
麻布台マンション401号
Tel：03 (5563) 0626　Fax: 03 (5563) 0752

NPO法人日ロ交流協会第24回通常総会開催

服部 文男

東京のさくら開花宣言が出された翌日の令和6年3月30日（土）に、東京港区の新橋生涯学習センターにて日ロ交流協会第24回（通算60回）通常総会が開催されました。

服部会長の開会宣言のあと議長選出があり、会員の推薦により服部会長が議長に指名されました。次に出席者数の報告を江本事務局長から報告があり、出席者24名、書面表決63名、表決委任7名、計94名。正会員数は149名で日ロ交流協会定款27条に定める定足数（正会員数の3分の１以上）に達しており、総会成立確認を宣言されました。同定款30条に基づき、議事録署名人の選出が行われ、江本大輝氏（事務局長）並びに島山堅蔵氏（事務局次長）が選任されました。

審議事項では、第１号議案2023年度事業報告、第2号議案2023年度会計収支決算報告を島山事務局次長より、続いて監査報告を吉田臣吾監事よりあり、第１号議案、第2号議案、監査報告については拍手をもって承認されました。

続いて、第3号議案2024年度事業計画を江本事務局長、2024年度事業計画収支予算を島山事務局次長から説明があり、こちらも拍手をもって承認されました。

最後に、第5号議案として理事及び監事の選任がありました。現理事及び監事は本年3月末をもって任期満了となることから同定款14条により本総会で新理事及び監事を選出し、次の理事及び監事が承認されました。

理事（敬称略）は以下32名。秋元淑信、朝妻幸雄、岩本智子、内堀學、江本大輝、江守元彦、大矢温、大沢武久　岡崎好典、小川久美子、亀田慶一郎、小嶋大志、笠原以津子、須田毅、大道寺柳子、滝波秀子、武川覚威　千葉麻里、土屋正彦、中村忠敬、中村泰弘、中島崇子、名島薫、野口久美子、長谷川淑子、服部文男、日向寺淳一、松本康男、水口淳、山岸ひさ子、山田雄康、渡邉絹江、監事（敬称略）吉田臣吾。

以上を持ちまして2024年度第24回通常総会は10時40分に終了しました。この度、任期満了により退任の島山様、重松様、横山様、岩橋様、平野様、望月様、山口様には当協会に多大なご協力を頂いたことに対し厚くお礼申し上げます。

また、総会終了後、「アニメ映画・幕末のスパシーボ」の前半を放映しました。

1855年（安政元年）日露通好条約のため下田に来航したプチャーチンの率いるディアナ号が安政大地震の津波で大破し、戸田の船大工の協力を得て新造船（へだ号）を造り帰国するまでの日ロ交流のストーリーです。

放映に先立ち、この映画を自費制作した、元衆議院議員で防衛庁長官も務め、本協会の会員でもある斉藤斗志二氏にご臨席を賜り、ご挨拶をいただきました。

なお、第24回通常総会後の4月1日新橋生涯学習センターにて、2024年度第１回理事会を開催。日ロ交流協会定款14条に基づき、新理事の互選により役付理事（20名）及び顧問が承認されましたことをご報告いたします。　（会長）

お知らせ

●キルギス料理講習会
日時：2024年5月12日（日）9：30～12：00
場所：田町「リーブラ」料理室
講師：キルギス大使夫人ソトバエワ・ジャミーリャさん

●日本の家庭料理講習会
日時：2024年5月25日（土）9：30～12：00
会場：田町「リーブラ」料理室
講師：小野田正子氏
＊エプロン、布巾、ハンドタオル、持ち帰り容器をご持参ください。参加は会員、関係者のみとさせていただきます。
＊詳細は事務局へお問い合わせください。

●能鑑賞
日時：2024年5月5日（日）13：30～
仕舞：邯鄲、能：定家、狂言：素袍落ほか

●ロシア語教室生徒募集中！
初級、中級、上級クラス、プライベートクラスを経験豊富なロシア人教師が担当いたします。オンラインレッスンもあり見学もできますので、どうぞ事務局までご連絡ください。
＊お問い合わせは事務局までお願いします。
Tel:03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「０１」と入れてください。振込先:郵便口座 00160-9-66486、加入者：日ロ交流協会
連絡先:日ロ交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org

日ロ交流バスツアーの実施

岡崎 好典

交流ツアー部会では、「国際女性デー」としてロシアの祝日となっている3月8日（金）と翌日の9日（土）を利用して、1泊2日で飛騨高山と世界遺産白川郷を訪ねる日ロ交流バスツアーを実施しました。このツアーは、2024年度から複数回の実施を予定している交流バスツアーの第1回目で、最終的な参加者は、ロシア人26名、日本人9名の計35名となりました。途中で12名のキャンセルが発生したため、一人当たりのバス代が上がってしまい、やむを得ず途中で参加費を千円引き上げさせていただきましたが、ご迷惑をおかけしたことをまずもってお詫びいたします。

これ以上のキャンセルが出ないようにと祈りながら何とか出発当日を迎えたのですが、急速に発達した低気圧の影響で、関東南部は明け方からの積雪で交通機関が乱れ、遠方からの参加者の集合が遅れるなど前途多難な出発となりました。出発後は天気も回復し渋滞もなく順調に進んだのですが、往路は安全優先で中津川インター経由となったことから高山への到着が16時過ぎと遅れてしまい、閉館時間も迫る中、慌ただしく高山陣屋を見学し、予約時間を繰り下げて古い町並みにある舩坂酒造店の見学・試飲そして買い物を楽しみました。宿泊は、高山グリーンホテル。こちらも到着予定時間を45分ほど繰り下げて18時過ぎに何とか滑り込みました。各自入浴後、19時から宴会場にて全員で夕食。私たちの部屋のメンバーは、夕食後も自分たちの部屋で飲んでいましたが、夜遅くになってもにぎやかで盛り上がっているロシアの皆さんの部屋が近くにあったので途中から混ぜていただきました。深夜2時過ぎまでお酒を飲みながらいろいろお話しをさせていただくことができて、泊まりでないと体験できない、とても有意義で楽しい時間を過ごすことができました。

客室は畳の和室で、ロシアの皆さんにもベッドではなく布団でお休みいただきましたが、日本スタイルの観光ホテルを気に入っていただけたでしょうか。このホテルは私の前職のグループのホテルで、自分で言うのもなんですが、館内が広くきれいで温泉大浴場が2か所あるほか、お土産処も品揃えが非常に充実していて、なかなかいいホテルだと感じました。また、出発時には一人ひとりに少しだけお菓子をお土産として用意してくれたのもありがたかったです。

二日目は白川郷に向かいました。途中までは晴れていたのですが近づくにつれ徐々に雪が降りだし、到着した時にはかなり激しく雪が降っていました。この雪の中を駐車場から合掌造りの重要文化財である「和田家」まで歩いて中を見学しました。その後は皆さんを展望台までご案内したかったのですが、あいにくの天候から希望する方だけシャトルバスで展望台へ。展望台に着いた時は案の定、白川郷の町並みが全く見えなかったのです。しかし、せっかく上って来たのだから「雪よ。止んでくれ!」と必死にお願いしたところ、暫くしたらかろうじて町並みが見える程度に雪が弱まってくれて、わずかながら展望台からの眺めを楽しむことができました。駐車場までの帰り道は、雪の中、沿道のお店に寄り道しながら散策して帰りました。こんなに寒い中であっても「マロージェナエ」を食べながら歩いているロシア人を見かけたときは「さすがロシア人！」と思いました。2月中旬のテレビニュースで、暖冬で白川郷の雪が解けてしまい雪景色を楽しみにして来た観光客を失望させているという報道がありましたが、それどころかまさに真冬の白川郷の景色を存分に楽しむことができました。

真冬の白川郷を満喫した後、往路とは異なり近道の「安房トンネル」経由で東京に向かいました。トンネル以外はカーブの多い峠道でしたが、景色もよくドライブを楽しむことができました。

今回のツアーは、東京から遠かったことなどから十分に観光の時間が取れず、参加された皆さまにはたいへん申し訳なく思っております。今後は、バス会社や旅行会社とより詳細に行程の検討を重ね、皆様により満足していただけるツアーを計画・実施していきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

（副会長）

特定非営利活動法人日ロ交流協会 新役員一覧

会　長	服部 文男	常任理事	武川 覚威	理事	長谷川 淑子
副会長	江守 元彦	常任理事	大道寺 柳子	理事	松本 泰男
副会長	千葉 麻里	常任理事	中村 泰弘	理事	水口 淳
副会長	岡崎 好典	常任理事	中島 崇子	理事	山岸 ひさ子
専務理事	日向寺 淳一	常任理事	野口 久美子	監事	吉田 臣吾
事務局長	江本 大輝	常任理事	山田 雄康	名誉顧問	栗原 小巻
常任理事	秋元 淑信	常任理事	渡邉 絹江	顧問（理事兼任）	朝妻 幸雄
常任理事	岩本 智子	理事	大矢 温	顧問（理事兼任）	内堀 學
常任理事	大沢 武久	理事	須田 毅	顧問	野崎 守二
常任理事	小川 久美子	理事	滝波 秀子		（以上　計35名）
常任理事	亀田 慶一郎	理事	土屋 正彦		
常任理事	小嶋 大志	理事	中村 忠敬		
常任理事	笠原 以津子	理事	名島 薫		

日帰りバス旅行

濱 桜子

4月13日土曜日、日ロ交流協会のバス旅行に初めて参加しました。参加者は52名。大型バス満員で出発。車内で日露のプレゼント交換がありました。この企画、素敵ですね！私の袋の中にはパスチラと今話題のキルギスのチョコが入っていました。

最初の訪問先は、群馬県利根郡川場村にある臨済宗建長寺派「青龍山　吉祥寺」。花の寺と言われているだけあり、境内は早春の花、水芭蕉や水仙、カタクリの花などが咲いていて美しい。そして何と満開の桜も。1815年建立の堂々たる山門や本堂、釈迦堂、境内を流れる小川のせせらぎが心地よく、池や滝もあり、水を感じられるお庭になっています。宝物殿である古月庵等建物もお庭も楽しめます。枝下桜をバックに記念撮影。

通訳の方が皆さんに感想を聞かれると、大使館の皆さんからも拍手が上がり楽しめたご様子。

ランチは、しゃぶしゃぶ。お肉美味しかったです。

ランチの後は、大使館からご希望のあった「吹き割の滝」へ。東洋のナイアガラと呼ばれるだけあり、特に谷底へ落ち込んで行く地形の所など迫力満点。前日の雨もあり、水量も増しているとのこと。水量も流れの速さも凄かった。十分楽しめました。

次は「いちご狩り」（沼田市、原田農園）甘酸っぱいいちごを十分に味わいました。この後、幹事の岡崎さんからの提案で、桜並木の散策をすることに。大手電気メーカーの赤城工場の敷地に延々と続く桜並木を鑑賞。スマホの写真を見返しても、写真一杯、果てまで続く桜並木が納められていて、本当見事でした。向かいの小さなドライブインに、無料の足湯もあり皆さん楽しんでいました。

１日楽しめる日程でした。大使館の皆さんも楽しんでいただけて良かったです。幹事の岡崎さん、通訳の小川さん、安全運転で快適なドライブを提供して下さったバスの会社のドライバーの原さん、プランの企画手配から当日の添乗まで心配りして下さった旅行会社の金野さんに感謝です。

ありがとうございました～！！

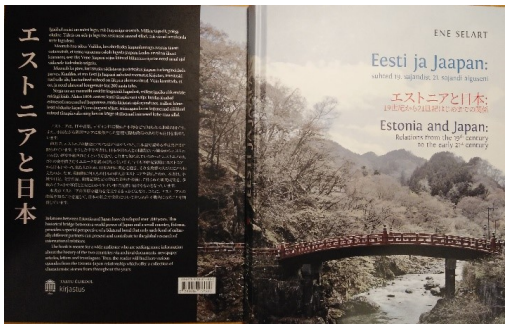
「エストニアから」日露交流史を見直す

倉田 有佳

4月中旬、エストニアのタルトゥ大学Ene Selart（エネ・セラルト）教授が来函した。タルトゥ大学の前身は17世紀にスウエーデンによって創設されたドルパット大学（ドイツ語で「ドルプト大学」）で、同大学出身者には植物学者マクシモヴィチや在函館ロシア領事館医師アルブレヒトがいる（「会報」第335号（2023年9月号））。

このたびの来日は、先頃タルトゥで出版された自著『エストニアと日本：19世紀から21世紀はじめまでの関係』（エストニア語・英語・日本語の三か国語表記。230×280 mm、280頁）【写真】を紹介することが目的で、函館にはロシア人墓地に眠るМатис Векман（マチス・ヴェクマン。「アスコリド号」の水兵。1866年6月5日没）の墓を自分の目で確かめるために足を運ばれた。

「マチス・ヴェクマンを姓名だけで「エストニア人」と断定できない。バルト・ドイツ人の可能性もある。だが、ロシア帝国時代の海軍将校は貴族階級のバルト・ドイツ人が占め、水兵にはエストニア人が多かったため、ヴェクマンはエストニア人の可能性が高い」、とSelart教授の語り口は手堅い。



『エストニアと日本』は、エストニア県で生まれ育ったバルト・ドイツ人のアダム・ヨハン・フォン・クルゼンシュテルン[ロシア初の世界周航を指揮した]をエストニアと日本の関係の礎を築いた人物であり、「エストニアからの最初の来訪者（1804－1805）」と位置付けている。他方、日本を訪れた最初のエストニア人としては、1866年5月4日から6月13日にかけて軍艦「アスコリド号」で長崎、函館、横浜を訪れた水兵ユリ・ユリソン（1832－1899）を挙げている。こうした事情を理解するには、リヴォニアと呼ばれたエストニアの地で13世紀以降移住してきたドイツ人が支配層となっていった歴史を知らねばならない。その手引書として最適なのが『エストニアを知るための59章』（明石書店、2012年）で、同書の編著者の小森宏美氏は上述の『エストニアと日本』のエストニア語から日本語への翻訳者でもある。

Selart教授は、「ロシア艦にはエストニア人が水兵として乗船していたはず。エストニア人の識字率は高く、海軍は読み書きができないと入れなかったから」、とも話す。彼ら日本に来航した「船乗り」、そして日露戦争で捕虜となったエストニア人が日本から家族や地元新聞に送った手記や手紙は、エストニア語新聞に掲載され、日本（人）を知る情報源になったという。

ヴェクマンに関する情報は函館に残されていないが、『ロシア国立海軍文書館所蔵　日本関係史料解説目録』（東京大学史料編纂所、2010年、92、282頁）を手繰ってみると、ヴェクマンやユリエフが来航した時期に近い1866年6月10日（西暦22日）付で「アスコリド号」艦長が、「箱館でのロシア船への供給のための食糧保有量と、パン及び肉の確保が難しかった」ことを海軍大臣に書簡で伝えていたことがわかった。「エストニアから」の視点で日露交流史を見直してみたい。

（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

サンクト・ペテルブルグのガイドさん

畔上 明

4年前のコロナ禍により旅行業界では世界的な大打撃を被り、弱り切ったところへ2022年2月24日からのロシア軍のウクライナ侵攻により日本外務省のロシアへの渡航中止勧告、それまでロシアでの観光ガイドを生業としていた方々の胸中の苦しさは想像を絶します。

現地日本語ガイドの教養の高さ、ホスピタリティ溢れる心遣いには定評がありました。ロシアとの旅行に関わる仕事を半世紀近く携わってきた我が身にとっても、親しくなった現地ガイドさんとは私的な会話も心に残ります。誕生した子供達、その成長、そして孫、時には離婚悲話を漏らす方もおれば、人生の悩みから過剰な飲酒や喫煙、或いは悲惨な最期の知らせ・・・。折々の出会いでも子供の成功話を聞くことが出来れば共に喜びあったものでした。バスの中で素晴らしい歌を披露してくれたガイドさん、その歌の数々に関心を示すと夜なべして録音したテープを翌日プレゼントしてくれたことも。貴重な思い出の蓄積が宝となっていただけに、ガイドの仕事では生きていけぬ現状、別の工夫をせざるを得ない彼らへの同情を禁じ得ぬと共にたくましさも感じます。

日本語教育では長い歴史と実績を積み上げてきたサンクト・ペテルブルク大学を卒業した日本語ガイドは特に優秀な方々がおられ、その能力をユーモアで包んだエピソードが微笑ましく思い出されます。

アレクサンドル・ゲルツェフさん

知識豊かなアレクサンドル・ゲルツェフさんとは「夏の宮殿」を散策すれば傍らの野の花についての蘊蓄を語ってくれ、「エカチェリーナ宮殿」では建物にばかり目を向ける客を尻目にこっそりと秋晴れの青空と黄葉の樹木の景観にカメラを向けるよう勧めてくれます。大黒屋光太夫が女帝と謁見したのは宮殿の大広間ではなく隣の絵画が壁に並んだ部屋であること、昔の彼の視線が電磁波として微かに壁の絵画から反射されてきているといったユニークな話も忘れられません。「エルミタージュ」のルネッサンスの間では普段のハイライト巡りならば通り過ぎてしまうジョルジョーネの「ユディト」が好みの絵画とあって、美しいユディットの足元に敵将ホロフェルネスの首がゴロリとさりげなく描かれている解説から旧約聖書外典の物語へと進んでいくことも楽しみの一つでした。

通りゆく建築物の説明が続く中、交差点でバスが止まったころあいに「ところで今、私たちはどこの町にいるでしょう？」と観光客に質問します。戸惑いながらも皆「サンクト・ペテルブルクの街ではないのですか？」と答えると、「今、信号待ち(町)です」と言葉遊びに興じるのでした。そして合間を見ては、「皆さん東京からやって来られたお客さんが多いようなので、質問です。東京の中で洗濯物を干すのにもってこいの場所はどこかご存知ですか？」（答えはアラ乾く！⇒荒川区）「ネズミが沢山いる区域は？」（答えはチュウ多く⇒中央区）「誰もが損をしない、そんな地域は？」（答えは皆トク⇒港区）

ロシア語は韻を踏んで詩をつくることから駄洒落が好まれ、日本語の中からも言葉の面白さを見付けだそうとしていることが窺えるのでした。

ロシアの秘境 カルムィキア（続）

浜野 道博

ロシア連邦にはモンゴル系住民の名を冠した行政区が3か所ある。極東のブリャート共和国、トゥバ共和国それに欧露部のカルムィク共和国（カルムィキア）である。現在のカルムィキアはボルガ河の右岸（西岸）で北海道の面積を一回り小さくした平原にあるが、祖先のトルグート族はロシアに臣属する前までボルガ河両岸にまたがるはるか広大な地域を支配していた。その威勢に清朝の康熙帝（在位1661-1722）が注目し1712年使節を派遣し実状を探らせることにした。

北京からトルグート族アユキ汗の住地まで、直線距離でざっと3500㎞。戦乱に明け暮れる中央アジアではなく露領シベリアを経由して馬匹や河川に頼りながら踏破するのだが、6000㎞を超える道行は往きに2年、帰りに1年かかった。使節の一員である満州人官僚トゥリシェンが遺した紀行録「異域録」には「絶域に赴く」の文字が見える。

当時ロシアはバイカル湖の東にあるキャフタを交易所として中国から茶の輸入を行っており、この露清のシベリア交易路は「茶の大街道」と呼ばれ、トゥリシェン一行も途中までこの街道をたどる。1714年にようやく使節団はアユキ汗のもとにたどりつき、康熙帝の命を達したが、この使節が去って約半世紀後の1771年の冬、ボルガ・トルグートの運命が急転した。

トルグート族の住むボルガ流域にピョートル大帝時代以来ドイツ人やロシア人、ウクライナ人が盛んに入植し、トルグートは徐々に荒地に追いやられていた。アユキ汗の曽孫ウバシ汗はそれを嫌い臣下のトルグート族をそっくり引き連れて清朝支配下にあるはるかな故地ジュンガル平原への帰還を決めた。

しかし、出発決行の朝ボルガ河は結氷せず、右岸のトルグートたちが渡河できないまま、左岸のトルグート17万人は右岸の同族を残して帰東を開始した。取り残された右岸のトルグートが今日のカルムィクの祖先であり、「居残った」を連想させる「カルムィク」の名称はこれに始まるという。

トルグートの故地への移動開始を知ったエカテリーナ2世はその討伐をコサックに命じ帰東を急ぐトルグート人を激しく殺害し、清朝の保護下に戻ったトルグートはわずか7万人であった。右岸のトルグートはカルムィク人として生き延びるがその運命が東に去った同族より穏やかであったわけではない。

第二次大戦中に対独協力をスターリンに疑われ、1943年12月28-29日に老若男女9万3139名のカルムィク人は根こそぎ安住の地を追われ厳寒の中貨物列車で西シベリアへ送られた。移送途上で多数の死者を出し、あとを追うようにカルムィク自治共和国が消滅した。しかし、スターリン死後1955年に名誉回復が行われ、シベリアから帰還したカルムィク人が今日のカルムィク共和国を再興した。前回ご紹介したように、カルムィクの高校生たちはこの悲劇を語り継ぐ営みを行っている。

しかし、アストラハンで会ったロシア人歴史家はこの民族弾圧を「戦争のリアリズム」と擁護してはばからず、ユーラシアの多民族空間が生きるに易しいトポスではないことを思い知らされた。